



その五

食い物に関して

仙台へ来てから三度目の夏も過ぎ、九月にはいった。二年以上も経ったが私の生活は一向に改まる風も見えなかった。相変わらず万年床が座敷の真ん中であり、何カ月かに一度か知れないが、時々切羽詰まって洗濯するシーツがどす黒く肌触りも悪く敷いてある。隣の三畳が物置であることも依然としている。廊下や勝手の板敷が、その上を土足のままで横行されているのも、依然としている。

金がないことも依然としている。私の仕事は人並に手当を貰っていて、不足を言えた義理ではないが、東京以来のなにがしかの借金があり、また少なくとも月に一度ぐらいは、二、三日から一週間ぐらいにかけて東京に出るし、貰うものは人並でも他人には通じないようなそういう支出を差し引き、家賃などを引くと、食料その他の為の私自身の手持ちの金は驚くべき少額となる。独り者とは言いながら、よくこれだけの金で、この口の養いが出来るものだと自分でも呆れるほどである。それでいて、余命を保つどころではなく、益々肥るかと思うほど体にはこたえないのだ。

そんなに詰まるなら、一月に一度などと東京へ出るのは止めてしまったらよさそうなのだが、私自身に言わせると、せめて一月に一度でも東京の空気を嗅いで来なければ、到底こんな北の国で、独りで暮すことは出来ないという気持だ。それでその度に東京から何時も、いやいやながら戻って来るので、常に仙台に來た最初の頃の気持が新しく繰り返され、在仙台二年にして、実に、依然たる思いがしきりにするのである。

こんな不必要な金使いは、他人の眼には物笑いだろう。しかしあとが苦しいと言っても、私自身としては、口で愚痴るほどの苦痛は感じていない。本心では、人が同情しなくとも大して痛痒を感じないほど、そう金のない苦しさに私は慣れていく。考えて見れば、仙台へ来る前の東京の生活というのがすでにそれだった。親から人並に仕送りを受けていながら、下らないことに金を費やして、自分の生活と來たら粗衣粗食を極めているのだった。こんな生活は、何も仙台へ來てはじまったのではない。

人には、金を使ってしまったので仕方なく粗衣粗食をしようとするが、よく観察して考えると、この粗衣、ことに粗食などは、仕方なくどころか、それをすることに一種の熱情を持っているのではないかとさえ思われる節がある。

朝、顔を洗って出掛ける。飯は勤め先の研究所へ行って食うことにして、途中で買っていく。途中に一膳めし家が二、三軒ある。その一つに寄る。私は或る人の忠告によって、すべてそういう買物の店を馴染にしないことにした。その一つの店で、白い飯だけを薄板に包んで貰う。気がつけば沢庵を僅かばかり添えてもらう。これが金拾銭也である。これを持って研究所に行く。正午になる。研究所の食堂には、私の専用の副食物が備えてある。「それは不味い」と言う茶漬用副食物の瓶詰であるが、この粉末を先程の未だ暖かい白

飯に振りかけて食う。周囲には、研究所員と一緒に飯を食っている。昼食にさえも栄養というものを考えざるを得ないほど蒼い顔付をして元氣のない彼等は、この私の貧しい食いに、眼を見張るのである。私はその視線の中で相当に舌鼓を打ちながら、満足して食い尽くすのが例であった。

この時の、私の満足して快く食い尽くすという気持ちには、単に味のみでないものはいっている。こんなものでも食えるぞ、少なくとも俺にはこれで足りるんだぞ、ということとを他人に誇示したい気持ちだが、味の他に加っているようだ。

この変な満足の、淵源をたずねて考えると、私は自分が少なからず影響を受けた祖父のことを思い出さずにはいられない。

私の物心つく頃には、すでに祖父は家業を父に譲ってしまったて、畑でもいじるか、裏の離れの部屋に閉じこもって、「八犬伝」や「日本海海戦記」だとか、旅行した気持ちで見ていると何時も言っていた「日本全国写真帳」だとかを、厭わずに繰っている老人だった。この祖父が、どんな金か知らないが、臍繰りを持っていた。色々のお説教の後で、どうかして機嫌のよくなった折りなどは、臍繰りの中から赤い銭を出して、私にくれることがあった。時には、私にそれで近所の駄菓子屋から、蒸し芋を買ってこさせた。祖父は私に、これをいきなりかぶり付くようには食わせないのだ。指でつまめる程度に、小さく千切つて食え、と言うのである。祖父自ら、その範を示して、千切つて食い、私もそれに倣った。そして、ややあって祖父は、いつもの癖の、首を傾げた思い入れを言うのであった。

「吉郎。どうだ。こうして食うと、栗ン味ンするら——」（栗の味がするだらう——）
成程そう言えば、その時の一口にする分量の連想も手伝うのか、確かに栗の味がするの

である。私は子供心にも祖父の命令のこの魔法的効果に非常に驚いて、それ以来一層祖父を尊敬するようになった。

若し私に、不味いものを美味しく食う手腕があるならば、それは確かに祖父の血とその感化である。研究所の食堂に於ける、正午の朝飯もこの祖父の血で食ったらしい。貧乏を好む所以も、このような祖父の処世上の芸術的手腕の影響だろう。

この朝食と匹敵するのは、夜中に工夫して食べる夜食である。宵のうちに、白飯を何処からか工夫して来れば、それで生味噌の茶漬をする。私の台所といえども、味噌ぐらいは、用意してある。それに葱でもあって、刻めば尚いい。昔最明寺入道さいみやうじは生味噌で飯を食って舌鼓を打ったと言うが、これはなにも質素節約の手下にはならない、と私は思うのだ。この生味噌の茶漬などは、実際はかなり美味しいのだから、節約の節約たる所以や気分とは一致しないものだ。飯がなければ、有り合わせの白米を洗って鍋に入れて、火にかける。火を起すのは、極めて厄介なことだが、飯を作る熱情と同様に、一つには空腹が然らしめるのであるから、まめにやる。鍋の中のものか粥になるかは、出来てしまつて見ないと判らない。塩鮭などの用意は殆どない。香の物などもない。勝手の隅に野菜の屑を紙屑と共に捨てる場所があつて、そんなところをほじって見ると思いがけなく大根や人参の切れっ端が出て来ることがある。それで味噌汁が（若しこしらえようとすれば）出来るわけである。飯の方が整うと、昨日の飯が乾いてこびり付いている茶碗や箸を洗う。布巾だつてないことはない。

これらは大体、半分は腹が減つて来た勢い、つまり飢に駆られてする手まめさであるが、どうもこのやり方をよく考えて見ると、ここにも何かしら如何にも心得た風な、こういう

生活の要領に、少し板に付きすぎたものが感じられる。

祖父はもと百姓だったせいかな、どう考えても上品な隠居ではなかった。食い物も母屋で作るものを三度三度食っていないながら、時々自分でこっそりと、勝手なものをこしらえて食ったりした。例えば若葱わかねぎの出盛りだと、それで味噌あえを作ったり、畑に牛蒡が来ると、独りできんぴら牛蒡をこしらえたりした。離れの部屋の長火鉢には小鍋が乗っかけているので、祖父の立った時にソツと蓋をとって見ると、それも畑でとれたらしい馬鈴薯が、醬油で煮てあったりした。

ある日の午後、母屋には誰もいなくて、祖父がただ一人母屋の陽の当る縁側の隅で何かゴトゴトやっていた。傍へよって見ると、小さい播鉢に山の芋を下してすっているのだった。僅かばかりをこねているのを見れば、何時ものように独りでこっそり食べるつもりらしい。私が黙って祖父の顔を見上げると、祖父は微かに笑った。如何にも楽しみを隠しているような顔付だった。私の顔はその時、何か催促するような表情をしていたかも知れない。祖父は左手の親指についたとろろ汁を一寸眺めていたが、それを私の方に差し出した。嘗めろ、と言うのである。畑で肥柄杓ひしやくを振るう大きな汚い親指を見て、私は少なからず躊躇したのであったが、

「われも好きずらに、嘗めう」（「お前も好きだろうから嘗めろ。」）

と言われて、仕方なく、おずおずとそれをねぶった。ざらついた祖父の親指の気味悪い感触。その親指の腹についているぬるぬるして冷たい少し塩っ辛くて、鼻汁のようなとろろ汁。私は一口なめると、気持ちが悪くなって身を引いた。口の中に親指のざらついた感じと、大きな爪の堅い感じが残った。ただ気味が悪いばかりで、うまくも何ともなかった。

私が顔をしかめて、口端をなめていると、

「うまいか」

と、祖父は、声をひそめて言った。それだけ嘗めさせたんだから、他の奴には黙ってる、と言わんばかりだった。私は黙って言うとおりに頷いて、そんな気味の悪いものには、少しも未練がなかったもので、すぐ表へ石けりに出掛けてしまった。

母屋のお勝手の流しは、湯殿の前にあった。ある夕方、私は母に言い付けられて、流しの縁の上で鯉節をかいていた。その頃、私の家には鯉節搔きなどという便利なものは、なかった。一升枴のような箱に出刃包丁を当てて、その上で鯉節を動かすのである。丁度湯にはいつていた祖父は、風呂桶の中から私を眺めていたが、突然大きな声で叫んだ。

「えらいぞ、吉郎」

私は吃驚して、祖父の顔を見た。何を誉められたのか判らなかった。

「そうだ。そうだ。かつぶシア、斜めにかくだぞ」

と祖父は重ねて言った。誉められた理由が判ると、私は全く得意になってしまった。鯉節をかく時は、出刃包丁に斜めに当ててかけ、とは、祖父が何時も教えていたところであった。私はますます祖父の言う通りにして、一層早く忙しくうごかして、間もなく目的の量を作ってしまった。

私が、自炊的操作に、案外手まめなのは、矢張りこの祖父の血やその薫陶の然らしめるところかも知れない。こういう風だと一生涯こういう貧乏性が抜けず、私もまた老人になって隠居した時、孫に向かって、自分のとろろ汁のついた親指を嘗めろと言ったり鯉節をかく指図をしたりすることになるかも知れない。それもいいだろうが、兎に角孫を持つよ

うになったら、親指だけは嘗めいいように、充分清潔にしておきたいものだと思っている。朝食や夜食はそんな具合だったが、それに比べると、夕食は、まず一日の祝祭であった。これだけは他所に出て食べるものと定めていた。しかしその祝祭ぶりも、勿論懐中の資金との相談である。

時には、多少豊かな懐中の場合もあった。そんな時は日頃の埋め合わせのような気持で、大きな店に行つて、豪勢な夕食を腹一杯やりそうなものだが、それを私はしなかつた。或る程度以上の贅沢になると、何かしら、心の中に一種の倫理的な圧迫感が出て来る。もつともこの倫理的という言葉は、私自身が我が身可愛さに言うところであつて、他人が言うのだったら、もっと適切に吝嗇りんしよくと言う言葉で表すだろう。しかし私の場合は、金を愛する意味で徹底しているのではない。要するに、鯉節搔きのような下婢かひのなすべき仕事に小器用さを示して、誉められたりして育つて来た、私と言う人間の生活のスケールの小ささ、低さを表すのである。私は、よく食い物屋に行つて献立を見ている時、料理の名目にはあれこれと色々迷わされながら、値段については、厳然とした或る一定の標準が自分の心の中に出来ているのに、気がつくのである。ときにはこのお目付役に向かつて、食欲や何かをきっかけにした享樂欲が果敢に抵抗することがある。今日は、思わぬ金はいつた、とか、今日はどれだけの仕事を何のように片付けた、とか、今日はお前の誕生日じゃないか、とか、それでは、体がもたないとか、様々に吝嗇を説き伏せようとする。理由に窮してくると、この町は今お祭りだ、とか、此処にこれだけ半端な金が余っているじゃないか、と言つたことまで持ち出す。説伏も少しぐらいのことは、無理にねじ伏せるようにしないと効果がない。それが一寸でも不充分だと、食後に於ける吝嗇の呵責は激しい。こ

の状態は、言わば私の生活における後悔の典型的なものであって、食後の飽和的な安楽を、台なしにしてしまうのだ。この復讐的な影響を考えると、確かに、吝嗇は一種の熱情だと思う。スケールの小ささを保とうとする熱情、と言うと少しおかしいが、兎に角そんな風なものだ。これできて下らないことについての、大まかな浪費を、許しているのだから、随分矛盾しているが、浪費によって出来る結果は、吝嗇が自ら所を得て腕を振るうことになるので、その満足を合理的に与えてくれるものとして、案外、大目に見ているのだろう。

この禁欲的な熱情によって、私がある日の夕食を取る場所の選定は、中々難しくなってくる。「食堂」、「喫茶お食事」、「一品料理」、「おでん」などという看板を横目に見て、やり過ぎしながら、私は空腹を抱えて、街をさまようのである。実際に空腹を感じ始めてからの一時間や一時間半が、すぐこれで費やされてしまう。やがて、空腹に耐えかねてくる。また、さまようという憂鬱な感傷にも耐えかねて、いささか蹠蹠そつそつとして、終いにはもう何処でもいいと、いい加減な家へ飛び込んでしまう。空腹に吝嗇がねじ伏せられたのである。しかし、そのとき、余りにでたらめな選択放棄をすると、稀には店の非衛生な感じなどが、胸をむかむかさせたことがある。もともと、それは眼につく範囲内のことで、少なくとも眼の前だけでも恰好がついて居さえすれば、私の衛生観念などは沙汰の限りだ。

元寺小路に一軒そういう私の吝嗇を満足させるような一膳めし屋が発見みつかった。バスの通る埃っぽい道端に、汚れた磨り硝子の窓と硝子障子が表に面している。表の黒くなった縄暖簾の上には、廂の上に横に細長い看板があげてある。それには下手なペンキ字で、白飯がいくら、味噌汁がいくら、納豆、豆腐、にしめ、焼魚と細かに二十ばかり、値段表がずらりと書き込んである。私は先ずその極めて安価なのにひかれた。

店の中の土間は、よく仙台の家に見るように、道路から下がっている。左手に三尺ばかりの格子があつて、名ばかりの料理場だ。その向う側に料理の皿盛りの陳列棚がある。それから、珍しく冷蔵庫の小さいのと、右手は卓子が三つ、椅子がそれに相応した数だけ並べてある。みせの奥の方は座敷になつてゐるが、これがまた仙台でよく見るように、土間から一尺にもなつてゐない程の低さだ。座敷に坐つた客は、土間の椅子に腰掛けた客よりも低く、見下されてゐる。

店は四十五、六の髪を短くチヨチヨ刈りにした親父とその女房がやつてゐた。親父は頬骨こそ出ているが十人並みの男で、これという変なところはないが、女房の顔は変わつてゐた。鼻の存在などは無視したように、恐ろしく口の突き出ている女だつた。反つ齒と出つ齒とかいう種類のものではない。口と共に下顎も突き出て、唇の皮も充分に伸びて出ている。一口に言えば、馬が仰向いたような顔なのだ。実は、私はこの店に最初はいつか時この女の顔を見て些かギョツとした。容貌の奇怪なものにも驚かされたのだが、この顔には、すでに見覚えがあつたからだ。何時か定禅寺通りを歩いてゐた時、一軒の二階家の二階の雨戸を繰つてゐたのがこの女だつた。彼等夫婦はここに何か家を持つてゐたのかも知れない。その時は下から見上げたせいもあつて、世にも醜怪な顔に見えた。私は思わずじつと眺めて、慌てて眼をそらしながら、大變な顔付きもあるものだ、と思つたのであつた。店にこうしてゐても、彼女の、眉毛が濃くて、眼が下弦の月のようで、頭を束髪に結つてゐたことなどは、その口の恐ろしい醜さのために、殆ど眼につかなかつた。

子供もいた。十三、四になる女の子とその兄と、未だ他にいたかも知れない。女の子の顔は、まごう方もない母親の血統だつた。親父の十人並みの血も、いささかもそれを緩和

することが出来なかったようだ。普通は美醜によらず、少女というものは一般に年齢の愛らしさがあるものだが、この少女は、そんなことは思いもよらなかった。残酷な言い方をすればすでに醜怪の萌芽のような顔付きだった。子が親に似るといふことはこうなると因果だ。

私は、何時も大抵、飯と味噌汁を誂える。女房は井に飯をよそうと、親父は後ろ向きになつて、一人前だけ小鍋にうつした味噌汁を暖める。親父も女房も殆ど口をきかない。こちらの注文に返事をするだけである。親父は何時も下を向いていて、女房が何か持つて来ても、決してそちらを見たことがなかった。あの様子では、女房の顔などは恐らく一日中見る事などはないだろう。何時も不機嫌かと思ふほど無口で、そつぽをむいていて、動作も大儀そうだった。女房の方を見ないのも、見れば不愉快になるというのだろうか。誰かが言った「女の美しい容貌も、景色のようなものだ。馴れてくると、美しいことを意識しなくなる。」それならば、醜さについても、同じことが言えるのではなからうか。しかし、そうは言えないらしい。事實は醜は年月と共にますます醜に思われ扱われるようだ。醜は忘れられないのだ。我々一般が、醜さをひどく気にするのも、そのためだろう。

女房は、膳を持つて来る。或る時私はこの女の手を見て、再び吃驚した。その手が余りに綺麗で、清潔な指先をしていたからだ。そのまめに働く具合で思えば、料理や勝手の大部分の仕事、恐らく一家の洗濯物も、全部彼女がやるにちがいない。どうして、その手がこんなに綺麗なのだろう。あの顔の醜怪さから、あの働きぶりから、この家の貧しさから言つて、まるで奇蹟のように美しい指先だ。肥つてはいないが、細くてしなやかな指。指の根もとに、柔らかな窪みが出来る手の甲。その手が、この安物の井の縁や、盆のへりに、

ついたまま、私の眼の底に焼きつけられたように残った。あの醜貌とこの美しい手とはどういう巡り合わせだろう。塗り箸を手にとって、私は、ぼんやりと眼に残ったその手の残像を見つめていた。

不意に私の胸の中に、冷たいものがさした。この夫婦の対立的な不相応さに、一つの解決が、淫らに浮かんできた。そう言えば亭主の憂鬱な顔付きは、陽の光の下に於ける絶えざる毎日の後悔を表しているのではないだろうか。

何を考えている！ 馬鹿な！ 私は頭を振って、急いで飯を食い出した。他人の秘密を穿った疚しきで私の心は少し慌てた。吝嗇は、こんな店を選び当てたのだった。

九月上旬の或る夕方、私はこの店で飯を食っていた。この店の様子にも大分通じることが出来たが、しかし、数日に一度という例の用心をしつつ通っているので、この夫婦から、特別に声をかけられたりすることはなかった。私自身は勿論話をしかけなかった。この夫婦の何か屈託している無口が、私には幸いだった。値段は比較的やすかった。少なくとも勉強していた。兎に角、その点私の「吝嗇」のお眼鏡にかなった店だった。

店の奥にはその時、座敷に田舎の親父と若い男が酒を呑んでいた。若い男は、こちらを向いて、暑そうにワイシャツをはだけていた。その他に客はなかった。私は例によって、味噌汁と飯を注文して食ったが、何時もとは違って、その時は馬鹿に物足りなかった。良^くうなわれた畑の土のように、井の中に丁寧に軽くならしてある飯は、私のその時の腹具合に比して余りにも少なかつた。味噌汁は、味噌汁を盛るものとは思えないような大きな井に、仙台特有の薄いくせに無闇に塩辛い味噌汁で、大根と人参と牛蒡がゴタゴタ入れている。分量はあるが、内容の種類のもそれだけなのが、その時の私の気持に変に索漠^{さくぼく}と響い

た。しかし、何と言っても、これで一杯が五錢だ。文句も言えない。井の飯も七錢だから、もともと法外なすぎ具合の私の腹の方が無理だ。そこで私は吝嗇に掛け合つた。兎に角、いまは幸い錢がないのではない。それなのに、不足な飯で我慢しなければならぬと言ふことはない筈だ。不足な飯は、兎に角食つた後にも空腹の憂鬱が取り切れないで残る。充分金を持って、飯を食つておきながら、憂鬱だとは、馬鹿げているじゃあないか。それじやあ、余りに吝^{しみ}つたれと言ふものだ。エ？ けちけちするな。——言い忘れたが、私の吝嗇には、一つの特性がある。それは虚栄心が強いことだ。彼は吝^{しみ}つたれと言われるのが、大嫌いだ。吝嗇のくせに吝^{しみ}つたれと言われるのを嫌がるのはおかしいが、一方から言えば、愛すべき点でもある。それで彼を説き伏せる時、合理にも非合理にも、兎に角その結論を、貴様は吝^{しみ}つたれてるぞ、と言ふ所まで、漕ぎ着けることが出来れば、しめたものである。これは、丁度、男の抗議に対して、よく女が使う言葉に、「それは貴方のやきもちよ」と言つて男の口を封じてしまふ手がある。この卑怯でしかも極めて効果的な、女の言葉に似ている私の中の享樂分子は、その点決して男性的ではないようだ。この手で、頑固でひたむきで、高潔で、禁欲的で、男性的な吝嗇が、しばしば、易々と攻略される。この時も、吝嗇の抗議は直ちに抑えられて、私の胸の中は、衆議が一致した形になつた。他人ならこんな状態を、決心したと言ふだろう。私は、顔を上げて、陳列棚を物色した。貧しい棚には、大きな皿が二つおいてあるきりだ。一つには、昆布巻きが十ばかり、茶色の煮汁とともに散らばつていた。どうもこれには食指が動かかなかつた。もう一つの皿の上には、見たところ、煮た鯉の切り身らしいものが三つ四つ転がっている。これを貰うことにした。小皿にとつて持つて来たのを、つついて見ると、非常に固い。煮たらしいのに、この切り身の半

分ぐらいしか、煮汁の色がしみていない。箸で割って見ると、なまり節のように、白い。食って行くと、煮汁の染みていない方の半分はまだ生煮えと見えて、中の方が薄赤かった。わたしは、これを平気で食ってしまった。吝嗇が、素早いところ、値段表をぬすみ視て、この煮魚一切れが、金五錢也を見てとった。この生煮えを平気で食わせたのは、吝嗇の獲た報告によるものらしい。はつきり言うのと、こうだ。――何だ、生煮えじゃあないか。一体これでいくらなんだ。ナニ？ 五錢だ？ 安いな。それじゃあ、仕方がない。――仕方がないと言うのは、生煮えでも仕方がない、と言う意味なのである。少し乱暴だが、私の衛生観念は、多くの場合はこのような吝嗇の言い分には、太刀打ち出来ないのだ。

その他に、白飯のお代りをし、ついでに、漬物のお代りをした。漬物と言っても、沢庵を、へなへなするほど薄く切ったのが二切れである。僅か二切れのつましきは、三切れの迷信に感謝しているように見えた。売る方からの気持で言うと、それは四切れでは多すぎる。何となれば、この品は白い飯への無料の奉仕品だ。私の吝嗇はこの奉仕品である点を、すでに胸に銘記していたのである。

この夕方の祝祭は、こうして、終わった。私は満腹して町を散歩した。途中例によって、何かしら古雑誌の類を買い込んで、帰宅した。その夜は、二時に寝たか三時に寝たか、今、覚えていない。翌日になって、私の体にどんな変化が起るのか、神ならぬ身の、知る由もなく、私は平常の通りに、安心して眠りに落ちたものようである。

129 頁	127 頁	125 頁	124 頁	120 頁
三切れの迷信…三切れは身を切るに通じると、切身を二切れ付けること。	うなわれた…鋤られた。土を耕し鋤く。	チヨチヨ刈り…茶摘みの時、先端だけ粗末に摘むこと。	蹠蹠…足がしつかりしないで、よろめく	最明寺入道…北条時頼の故事。徒然草第二一五段。